

第6回 3限

『批評理論入門』廣野由美子著 中公新書 2005年

第1部9 「声」・10 「イメージャリー」について

大下 由佳

9 「声」

《キーワード》

モノローグ的………作者の単一の意識と視点によって統一されている状態。

ポリフォニー的………多様な考えを示す複数の意識や声が、それぞれ独自性を保ったまま互いに衝突する状態。対話的。

→ミハイル・バフチンの中心概念。トルストイのモノローグ的小説とドストエフスキイの「対話的」テクストを比較。ポリフォニーとはあらゆる小説に固有の特徴であるとした。→小説とは、いくつもの異なった文体や声を取り込んで、多声的なメロディーを織りなす文学形式である。

《章の要点》

モノローグ、ポリフォニーの説明と、バフチンの研究を紹介。フランケンシュタインにおけるポリフォニーや、アルフォンスの声、エリザベスの声を用いて示している。

アルフォンスの声………大事を伝える手紙にさえヴィクターに対する非難を前置きに書いている。息子が帰ってこないこの苦しみを内包。

→ヴィクターが親不孝者だと読み取れる、「もうひとつ別の見方」を提示。

エリザベスの声………ヴィクターからの返事がないことにじりじりする。嫉妬から読み取れるヴィクターへの恋心。聖女としてのエリザベスではなく、血の通ったふつうの娘としての彼女の姿を見る。

→平凡な女ごころ、ヴィクターの語りとは違う彼女がわかる。ヴィクターが返事を書く場面が省略されていることにより、彼はさほどエリザベスを愛していないのでは?との疑問が生まれる。

P80のアイロニー………エリザベスはヴィクターが返事を書かないために、他の女をインゴルシュタットで作ったと予想。「だれかほかの人を愛しておられるではありませんか?」と問いかける。しかし、ヴィクターは恋人がいるからではなく、怪物がいるからエリザベスを避けている。

このエリザベスの問いかけは、ヴィクターに対し「恋人よりも怪物が大事」「怪物に夢中なのだ」と彼の行動を皮肉に表現している

ようにも解釈できてしまうのだ、ということ。

《概念定義・理論補足》

モノローグ 語り手が別の登場人物の発話を伝えるときにつねに二声的になるため、バフチンは、いかなる小説も完全にモノローグ的ではあり得ないと主張している。ⁱ

《意見・疑問》

モノローグがたしかに小説において不可能であるかもしれないと思う。ひとつの声だけに頼って小説を語らせるとなると、非常につまらないし、それはただの独白であるし、登場人物が語り手（作者でなければならない）のみの日記にすぎないと思う。ということは、これもまたひとつの焦点化の名前だけで小説を分類できないのと同じで、モノローグ小説というものは存在しない、ということなのだと思う。しかし仮に形態が詩であれば、完全モノローグというものは成立するはずだ。いったいなぜ小説ではモノローグが不可能なのであろう。なぜ小説は必ず二声的であるのだろう。

《応用可能性》

ポリフォニー的であるということは、二人以上の登場人物あるいは語り手によってそれぞれの人物が語られることにより、人格やその意識というものが多面的に理解でき、その世界観も重層的に見てとれるということだと解釈した。小説ではどれも必ずこの手法を取らざるを得ないようだが、映像作品ではその必要がないように感じた。一人の人物の視点、感情、その人物から見えた世界しか描かなければ、それはモノローグ的であると言えると考えるからだ。

10 「イメージャリー」

《キーワード》

イメージャリー……ある要素によって、想像力が刺激され、視覚的映像などが喚起される場合、そのようなイメージ（心像）を喚起する作用のこと

- ・メタファー……あることを示すために、別のものを示し、それらの間にある共通性を暗示する場合
- ・象徴…………特に類似性のないものを示して、連想されるものを暗示する場合
- ・アレゴリー……具体的なものをとおして、ある抽象的な概念を暗示し、教訓的な含みを持たせる場合

〈森〉

メタファー……「風車の森」 風車の群れを森に譬える

アレゴリー……「森」は「過ち」 寓意的物語では、背後にもうひとつの意味体系が存在する（ダンテ『神曲』1304）

象徴…………「森」は「文明からの逃避」「自由の世界」「再生」「調和」など多重な意味合いを帯びたものとして象徴的に機能（シェークスピア『お気に召すまま』1599）

《章の要点》

以上の説明をおこなった後、『フランケンシュタイン』における月のイメージャリー解説、水のイメージャリー解説をおこなう。

〈月〉

- ・強烈な視覚映像と同時に、何か別のものを暗示していく、「象徴」の役割を果たしている。
- ・ギリシア神話では女性のシンボル
- ・狂気、想像力、詩的靈感、純潔、無節操、多産、不妊
- ・怪物がヴィクターの前に登場する時の月……不吉な出来事を予言する目印
- ・ヴィクターの創造行為や彼と怪物の親子関係……母性の象徴
 - ・ヴィクターが生命の創造に没頭している時の月……仕事＝分娩 から、人造人間を製作するヴィクターの「出産」行為
- ・女の怪物を作っている時、怪物は月明かりの窓辺で笑みを浮かべる
- ・女の怪物を壊した後、月夜になってから復讐を宣告される
- ・女の怪物の遺骸を月がのぼると小舟を漕ぎ出し、月が厚い雲に覆われた瞬間に海に捨てる

- ・エリザベスの亡骸の横でヴィクターがその死を嘆いている時、開け放たれた窓から月の光が差し込み、窓辺で嘲笑っている怪物の姿がある
- ・家族の墓の前で怪物への復讐を誓う時、ふいに昇った丸い月が怪物の姿を照らし出す
- ・ヴィクターが怪物と対面するときに月が出てくる……彼らが恐怖や激情に駆られる場面
=月は狂気を象徴

〈水〉

- ・ウォルトンは北極を目指して航海の旅に出ようとしている
- ・この作品自体、海の旅の話で縁取られている
- ・海や氷などの水のエレメント……死を象徴する危険な要素
- ・ジャスティース処刑後のヴィクターは、何時間も湖の上に居て、飛び込んでしまいたい衝動に駆られる……誘惑的な死
- ・女の怪物を捨てる時、海中にボコボコと沈んでゆくその音は、むごたらしい死の音として響く
- ・大海原で目覚めたヴィクター「ここが私の墓場になるのだ」
- ・クラヴァルの遺体は海岸に捨てられていた
- ・エリザベスが息を引き取ったのは湖のほとりの宿
- ・ヴィクター自身、船上で息を引き取る
- ・怪物も、暗い海のなかに姿を消す……死を象徴
- ・水=静穏な雰囲気をもたらす要素、忘却、浄化
- ・ヴィクターはクラヴァルとともにライン川を下る
- ・エリザベスとともに船で新婚旅行に出かける
- ・メタファーとしての水……川の生成の譬えによって、自分がいかに破滅へと向かったか、漠然と比喩的に示す

《概念定義・理論補足》

メタファー　　描写されているものとその描写に使われているものの比較を暗に含むが、はっきりと比較として出されているわけではない。たとえば「愛は危険なゲームである」というフレーズは愛するという行動と賭金の高い競争との比較を暗に意味しているが、その比較は暗示的なものにとどまっている。ⁱⁱ

アレゴリー　　ロマン主義の時代、批評家たちはそれまでほとんど互換的に使われてきたシンボルとアレゴリーを区別し始めた。サミュエル・ティラー・コールリッジは、アレゴリーは恣意的であり、それゆえシンボルほど「自然」ではないと主張。しかし、これはさまざまに否定されている。テキストや絵画

を神話や歴史を背景にして位置づける点でアレゴリーはシンボルより重要であるとしたヴァルター・ベンヤミン。彼にとってシンボルは束の間のはかないものに過ぎないので。ポール・ド・マンもアレゴリーの優越性を主張しており、シンボルはある種の超越的な知識や心理を含意するようにイメージと実体を結び付けようとするが、それはしょせん不可能であるとド・マンは考える。それに対してアレゴリーは、より有用性があり「正直」である。アレゴリーは自らと自らの起源との間の隔たりに注目を喚起する。そうすることによって、アレゴリーは、偶然性に支配される人間の知識と実存の彼方に不変の超越的な真理が確立されうる、というふりをしないのである。ⁱⁱⁱ

《意見・疑問》

アレゴリーとシンボルの違いについて、よく分からなくなってしまった。入門のほうの言ひ方は多少分かりやすかったが、それでも教訓的とはいったいなんなのか。そして、用語辞典の方にあった彼らの言ひ分はいったい何なのか。そもそも象徴とアレゴリーという二つの機能に、なぜ優劣があるのか。示すものに深みがあるかないかの違いで、深みがある方が優位ということなのか。それがなぜ「正直」といえるのか。。。

そしてもうひとつ、イメジャリーには体系的なものが存在するのかも気になった。伝統的にそう意味づけられているものというのは、決められているのだろうか。必要に応じて作者がつけ足したり新しく生み出しているように思うが、どうなのだろうか。

《応用可能性》

『フランケンシュタイン』が映像化される際、例に挙げられていた月や水というのは、象徴的に描写されているのだろうか。かぎられた時間のなかで映像化する場合、多くの作品はこうしたイメジャリーは消されているか、減少させられているような気がした。原作が存在する映像作品の場合、イメジャリーが減っていない作品というのはどれほどあるのだろうか。情報を共有してみたいと思った。

【参考文献】

杉野健太郎ほか 『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』 松柏社 1998年

i 『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』 p274

ii 『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』 p263

iii 『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』 p59, 60